

アリバイとしての探偵小説、 あるいは、精神医学に抗して書くこと

—F・グラウザーの長編小説『^{マッ}狂人が支配する』試論—

新本 史 齊

僕は正直喜んでいるのですが、こいつは少々退屈な類の探偵小説として読まれるでしょう、そして僕は口に手をあててほくそ笑むのです、だってこの本がやっているのはちょっとばかり違うことで、そのことには誰一人気づいていないのですから。

(F・グラウザー、1936年3月17日、M・リングーア宛ての手紙)¹

1 はじめに——「探偵小説作家」グラウザー

生前、ドイツ語圏における探偵小説作家の先駆者の一人として認識されていたにすぎなかったフリードリヒ・グラウザー (Friedrich Glauser, 1896-1938) は、死後、1960年代になって再発見された。1969年から74年にかけてチューリヒのアルヘ社から4巻本の作品集が刊行された後、1981年にはG・ザナーによる詳細な作品成立史を含む2巻本のモノグラフィー、1988-91年には1500頁を越える2巻本の書簡集、そして1992年にはローベルト・ヴァルザーの遺稿のミクログラム解説にも携わったB・エヒテらが編者となり、チューリヒのリマト社より長編小説7巻、散文集4巻、計11巻本の作品集の刊行が開始された。2011年の時点では、主要作品はヨーロッパ諸語を中心に17カ国語に翻訳されており、日本においても博覧強記の文人にしてドイツ文学翻訳者、種村季弘 (1933-2004) がその人生最後のエネルギーをグラウザー翻訳に捧げたことは記憶に新しい。² この種村の軽快な訳文で、グラウザー自身による、少々諧謔を交えた経歴紹介文を読んでみよう。

1896年ウィーン生。母はオーストリア人、父はスイス人。父方の祖父

はカリフォルニアの金鉱探し屋(冗談抜きで)、母方の祖父は宮廷顧問官(どう、すてきな混血じゃない?)。ウィーンで小学校とギムナジウム第三学級。それからグラリゼッグの田園教育舎で三年。次いでジュネーヴのコレージュで三年。しかしギムナジウム卒業試験直前に放校処分になる。新聞に当地のコレージュの文学教師の詩集の書評を書いたため。チューリヒにて州によるギムナジウム卒業試験合格。チューリヒ大学にて化学専攻一学期。それからダダイズム。父はぼくを(精神病院に)監禁させて当局の後見を受けさせようとする。ジュネーヴへ逃亡。その後の顛末は短編小説集『モルヒネ』でお読みいただきたい。ミュンジンゲン精神病院に監禁一年間(1919年)。同院を脱走。アスコーナに一年。Mo.の一件で逮捕。返還移送。ブルクヘルツリ精神病院に三カ月(ジュネーヴ当局がぼくを精神分裂病と診断したので、その対抗鑑定のため)。1921-23年、外人部隊。それからバリーで皿洗い。ベルギーの炭鉱。その後、シャルルロワの病院看護師。またしてもモルヒネ。ベルギーにて監禁。スイスへ返還移送。一年間行政管理の下でヴィッツヴィル刑務所。その後さる庭師の下働き一年。ミュンジンゲンでその後もある庭師の下働きをしながら精神分析を受ける(一年間)。庭師としてバーゼルへ、次いでまたヴィンタートゥールへ。この時期に外人部隊小説を書いた(1928/29年)。1930/31年エッシュベルク造園学校にて講習。7月31日、予後の精神分析。1932年1月から32年7月までバリーで「自由文筆業」(とは何というきれいごとのいい方)。父に会いにマンハイムへ。同地で処方箋偽造の廉により逮捕。スイスに返還移送。1932年から36年5月まで監禁。以上ノ通り。ソウ悪カナイ・・・。³

この主要事実のみを抜き出した、淡々とした記述を読んだだけでも、コレージュ放校以来、監禁—脱走—薬物中毒—逮捕—監禁・・・が繰り返されたグラウザーの生が、いかに悲惨なものであったかは容易に想像がつくだろう。(この生から逃れるためにグラウザーは自殺未遂事件も数度起こしている。)1918年に父の要請を受けたチューリヒ当局から禁治産宣告を下されて以来、常に後見人による「保護」の下で生きなければならなかったグラウザーは、実にその生の4分の1近く、計10年ほどの時間を精神病院、刑務所などの収容施設の内部で過ごしているのである。

そうした状況下でありながらグラウザーは書き続けていた。そして、作家グラウザーが、文壇の表舞台に登場するのは、長くはなかった人生最後の

3年間、上に引用した経歴の記述が終わった、ちょうどその後からである。1936年12月には長編小説第1作として『シュトゥーダー刑事 (Wachtmeister Studer)』が、翌1937年1月にはシュトゥーダー刑事第2弾として2作目『^{マット}狂人が支配する (Matto regiert)』が出版され、同年9月から翌1938年1月にかけてはシュトゥーダー第3弾として『クロック商会 (Klock & Co.)』が『シュヴァイツァリッシェ・ベオバハター』紙に連載される(書籍としては1941年刊行)。1937年12月から翌38年2月にかけては『チューリヒャー・イルストリールテ』紙にシリーズ第4弾『体温曲線表 (Fieberkurve)』が掲載され、同年、書籍として刊行。1938年2月にはシリーズ第5弾『チャイニーズ (Der Chinese)』がスイス作家協会のコンクールで第1位をとり、その夏には『ナツィオナル・ツァイトונク』紙に掲載、さらに書籍としても刊行されている。この遅すぎた出版ラッシュの中、グラウザーは、さらにいくつかの執筆計画をあたためていたが、1938年12月、恋人ベルタ・ベンデルとの結婚式の前夜、夕食中に昏倒し、翌早朝に他界するのである。

以上のように、グラウザーが生前に完全な形で刊行しえた作品は、新聞、雑誌に掲載された短編70編ほどを除けば、1936から38年にかけて刊行されたシュトゥーダー刑事シリーズのみだった。それゆえ、グラウザーは上述したようにドイツ語圏、わけてもドイツ語圏スイスにおける探偵小説作家の先駆者といった評価を受けることになり、1987年にドイツ語圏のミステリー作家協会によって創設されたフリードリヒ・グラウザー賞は、現在では長編部門、新人部門、短編部門、名誉部門をそろえた、ドイツ語圏においてもっとも権威あるミステリー文学賞となっているのである。⁴

しかし、探偵小説というジャンルに対するグラウザーの関係は、実のところ、きわめて複雑かつアンビバレントなものだった。自伝的記述にもあったように、そもそもグラウザーが最初にかこうとした長編小説は、フランス外人部隊での経験を下敷きにした小説『ゲーラマ (Gourrama)』だったのであり、グラウザーが私信の中で自作として自信を持って挙げているのも、この外人部隊小説と中編『闇の中 (Im Dunkel)』の二編であって、探偵小説ではなかった。⁵ 探偵小説というジャンルは自分本来の仕事場ではない、という意識がグラウザーには抜きがたくつきまとっていたのである。

この点について、グラウザーの作品および書簡における「探偵小説」についての記述を詳細に検討したP・ビューラーは、グラウザーにおける「探偵小説」の評価は「彼自身の気分、そして手紙の読み手に応じて、キツチュとポエジーの間を揺れている」とし、前者の場合、探偵小説執筆は何よりも食

べていくための手段、また執筆トレーニングとみなされるのに対し、後者の場合には、停滞してしまったジャンルそのものを刷新する行為として意味づけられている、としている。⁶ これは作家グラウザーの自己意識の解説として、妥当な指摘といってよいものである。しかし、作品そのものは、作家自身による控え目な意味づけに縛られることなく、たえず新たに読みなおされるべき意味産出体として読者の前に置かれている。その潜在的可能性はテキストに即した親密な読みを通してはじめて、立ち上がり、眼に見えるものとなるのである。

本論文は、グラウザーの長編小説『狂人が支配する』^{マット}の生成過程および作品の分析を通じて、グラウザーの小説作法と文学ジャンルとしての探偵小説との対話の中で、いかなる未曾有のテキストが実現されたのかを明らかにする。それは「探偵小説」という既存ジャンルを押し上げると同時に、「精神病院」という場所、「精神医学」という制度についての貴重な眼差しを、わたしたちに与えてくれるはずである。

2 精神病院を書くための書法を求めて——「人形芝居」から「探偵小説」へ

グラウザーは長編小説『狂人が支配する』^{マット}以前に、戯曲形式で「精神病院」という場を描こうとしたことがあった。1918年6月にジュネーヴにおいて窃盗罪で逮捕されたグラウザーは、アヘン中毒患者として収容された療養施設ベル・エアで「^{デメンティア・ブラエコクス}早発性痴呆症」の診断を受けた後、8月にはミュンジンゲン精神病院に移送され、翌年7月に脱走するまでの約一年間をここで患者として過ごすことになる。『狂人が支配する』^{マット}の舞台「ラントリンゲン精神病院」のモデルとされる施設との、これが最初の出会である。⁷

このときの入院経験をもとにして、1919年から1920年にかけて書かれた作品が、10ページに満たない小場面劇『狂人の人形芝居』^{マット}である。生前に刊行されることのなかったこの初期作品の評価は、一般にさほど高くはないといってよいだろう。初期作品集の編者B・エヒテ／M・パブストは、擬人化された狂気「マット」がシュールレアリスム風の口上を述べ、狂人たちがおのおのの誇大妄想を荘重でレトリカルな言葉で弁じる前半部分と、グラウザー本人を思わせる若者、その監禁を求める父親、診断を下す医師が散文的な会話を交わす後半の書き方の不統一を指摘することで、暗にこの作品に初期習作の烙印を押している。⁸

しかし、この場面劇は精神病院という場に対するグラウザーの基本的なス

タンスがはじめて打ち出された注目すべき作品であり、一見、不統一にも見える外観の背後には、ある一貫したモチーフが作品全体にわたって配されている。それぞれ黄、黒、緑、赤、紫の「仮面が裂ける」形で幕が上がる、5つの場面から、グラウザーの狂気に対する基本姿勢が表れている箇所を抜き出してみよう。

みずからをイエス・キリストと妄想する三人の狂人が登場する第一の場は、次のような口上から始まる。

数限りない夢が、昏い言葉を歌い、捻じ曲げられた像を映し出す。
数限りない夢を貫いて太鼓のリズムが鳴り響く。

Unzählige Träume singen dunkle Worte, spielen verdeutete Bilder. Durch unzählige Träume zieht der trommelnde Rhythmus. (MP.124)

二つめの場に登場する、五人の狂人の一人はこう語る。

俺の夢がやつらの世界を狭めてしまうとって、やつらは俺を監禁した。やつらはもはや息すらできなくなっていた、俺の夢がやつらを四角い家々の壁に押しつけたのだ。俺の夢は網、そいつで俺は、ピチピチ跳ねまわる人間どもを捕まえたのだ。

Nun haben Sie mich eingesperrt, weil meine Träume ihre Welt verengten. Sie konnten nicht mehr atmen, denn meine Träume drückten die Menschen gegen die Mauern der kantigen Häuser. Meine Träume waren Netze, in denen ich zappelnde Menschen fing. (MP.126)

第三の場は次の口上から始まる。

俺の脳中で戯れる夢を、ちょいといくつか描かせてもらおう。俺の夢を演じねばならぬ俳優が、生身の人間だということ、そんなことはたいした問題じゃない。

Ich erlaube mir, einige Träume darzustellen, die in meinem Kopf spielen. Daß die Schauspieler, die meine Träume spielen müssen, lebende Menschen sind, ist nebensächlich. (MP.126)

次いで第四の場では、父の要請で監禁されようとしている若者に監視長がこ

う語りかける。

お前は忘れねばならぬ、長年、歪んだ鏡をのぞき込んでいたことを。
お前は学ばねばならぬ、眠ることを、深い、夢想なき眠りを眠ることを。
Du sollst vergessen, daß jahrelang du in Zerrspiegel geblickst hast, sollst lernen
zu schlafen, den tiefen, traumlosen Schlaf. (MP.130)

そしてみずからをキリストと妄想する第一場の狂人たちが踊りながら再登場する最終場は、

われらは讃えよう、われらに夢を与えてくれた主を・・・。
Wir preisen den Herrn, der uns schenkte den Traum...

という口上で始まり、次の口上で終わる。

幸いなるかな、精神において貧しき者たちは、なぜなら天国は彼らのものだからである。[...] 天国は汝らの内にある。
Selig sind, die arm am Geiste sind, denn das Himmelreich ist ihrer. [...] Das
Himmelreich ist in euch. (MP.131)

引用箇所を読み合わせてみるなら、狂気に対するグラウザーの一貫した態度は明らかだろう。狂気に共通する要素として「夢想 (Träume)」を取り出すことによって、グラウザーは平板な現実にはおさまらぬ世界をみずからの内に抱いてしまう存在のありようを肯定する可能性を拓く。そして同時に、「夢想」を消去しようとする「治癒」こそ、神に与えられた「幸い」を剥奪する行為なのではないかという批判的問いをも提示しているのである。既存の価値観のあからさまな転倒をはかるこの書き方には、チューリヒ・ダダイストたちの手つきを見てとれることもできるだろう。グラウザーは1917年の春から夏にかけての夕べ、キャバレー・ヴォルテールでフーゴ・バル、トリスタン・ツァラ、ハンス・アルプらとともに、既成の意味体系を破壊し、市民的価値観を愚弄すべく、奇声を発し、唸り声をがなりたてていたのである。狂人たちが舞台上に立つこの場面劇は、ダダイスト・グラウザーと精神病院収容患者グラウザーの結節点を成すテキストとして読むことのできる作品なのである。

第四の場においては、「国会議員 (National Rat)」の父親が、品行の乱れた息子の監禁を求めて、鞆から「警察調書 (Polizeirapport)」などの「書類の束」を、さらには「高校卒業資格証明 (Maturitätszeugnis)」 「予防接種証明 (Impfzeugnis)」などの各種証明書を取り出し、「院長 (Direktor)」の側は、それらの書類をもとに「道徳的精神障害 (moral insanity)」などといった怪しげな用語で息子の病を定義していく。こうしたくたりは、グラウザーが何に対して、「夢想」を擁護しようとしていたかをはっきりと教えてくれる。家庭における父の道徳主義、精神病院における専門知による命名と一般化に対してこそ、グラウザーは統御不可能、通分不可能な個の内面を擁護しようとしているのである。

しかしその一方で、この短い場面劇において、グラウザーの「反精神医学」的想像力がいまだ萌芽的、限定的なものにとどまっていることも事実である。個々の「夢想」、それを消去しようとする権力、それに抗して「夢想」を讃える可能性は、バラバラに列挙、提示されているにすぎない。この「人形芝居」では狂人たちは舞台にのせられ、いわば客席から眺められているだけであり、精神病院に内在する者たちの取り交わす言葉、眼差し、立ち居振る舞いにわたる細部の叙述を通じて、精神病院という場がいかに機能しえているかを露にするようなリアリティーにはいまだ達してはいないのである。

1931年4月、ふたたび精神病院を舞台とする虚構作品に取り組んでいたグラウザーは、1925年の収監以来、手紙でのやりとりを続けていたミュンジゲン精神病院の精神科医マックス・ミュラーに宛てて次のように書いている。

ここでいくつかのものを完成させることができればと思っています、それは、かなり長めの物語、もしかしたら一編の長編小説となるかもしれないもので、例の監視人と女医の物語です。もちろん僕の悪癖のせいで、全体は顛狂院の雰囲気描写といったものに終わってしまうかもしれませんが、ことによると、全体をぎゅっと撓めて、そこから一編の現実の物語をつくりだすこともできるかもしれません。

Jetzt hoffe ich, daß ich hier ein paar Sachen beenden kann, eine längere Geschichte, die vielleicht ein Roman werden wird, über diese Wärter-Ärztin-Geschichte. Natürlich wird nach meiner schlechten Gewohnheit das Ganze wohl auf eine Atmosphärenschilderung des Irrenhauses hinauslaufen, aber vielleicht kann ich das Ganze doch so umbiegen, daß eine wirkliche Geschichte

daraus entsteht. (Br. 1/340)

この試みがどのような展開をみせたか、5年後の1936年3月に書かれた、友人のマルタ・リングア宛のグラウザーの手紙を読んでみよう。

この本については奇妙な具合です。聖なる精神病院についての控え目な、少しばかり意地悪いところもある本になるはずで、よくある類いの探偵小説なのですが、それが突然、全体がぎゅっと撓んで、とても厄介なことに詩的な(そして諷刺的な!)ものになり、その中の人物たちは生気を帯び始め、操り人形のままでいることにまったく甘んじようとしなくなったのです[・・・]。

Mir geht es komisch mit dem Buch. Es sollte ein anspruchsloses, ein bißchen boshafes Buch über die heilige Psychiatrie werden, ein Kriminalroman, wie es deren viele gibt, und plötzlich biegt sich mir das Ganze um, es wird poetisch (pötisch! bitte sehr!) sehr zu meinem Verdruß, die Leute darin fangen an zu leben und sind gar nicht damit einverstanden, nur so ein Marionettendasein zu führen [...]. (Br. 2/194.)

1930年にミュンジゲン精神病院で実際に起こった女医と看護師の恋愛事件に想を得て書きはじめられた「監視人と女医の物語」は、一方で短編『女医博士(Fräulein Doktor)』(1935)の形にまとめられつつも、⁹⁾ もう一方で、改稿を繰り返しながら「長編小説」へと膨らんでいき、ついには『狂人^{マッド}が支配する』へと結実するのだが、その初期構想段階である1931年と、ほぼ完成段階といえる1936年の手紙を読み比べると、5年の間に生じた出来事は、差異の形で凝縮されて浮かび上がる。

まず1931年のグラウザーは、ともすれば「雰囲気描写」の集積に傾きがちな自分の書き方を反省しつつ、それを克服し、物語的構成を持つ全体を実現したいと考えている、そして1936年のグラウザーは、ある意味、ほぼそれが実現できたことを報告している、と言っていいだろう。全体を「ぎゅっと撓めよう(umbiegen)」と考えていたところ、全体が「ぎゅっと撓んだ(umbiegen)」といっているのだから。しかし、起こったことが同じでも、それが他動詞的に引き起こされるのと、自動詞的に起こるのとでは出来事の意味が違ってくる。ここでの変容は、作家グラウザーの意思の統御を超えたところで生じているのである。

「操り人形」についても同様である。二つの手紙を読み比べると、いまや1919年の人形芝居における弱点までもが克服され、ついに生きた物語が展開し始めたことを言祝ぐべきなのでは、とも思えるのだが、ここでもグラウザーは「とても厄介なことに」と書き、「甘んじようとしなくなった」と書いている。やはり、上記の変容はどうやら書き手グラウザーの意に反して起こったことであり、そのことにグラウザーは困惑しているようなのである。

この想定外の成り行きに密接に関わっているのが、「探偵小説」である。グラウザーは1932年に、最初の探偵小説『三人の老婦人のお茶 (Der Tee der drei alten Damen.)』の執筆を開始している。¹⁰ つまり、この5年間の間にグラウザーが新たに試みた形式が「探偵小説」なのである。1936年の手紙を読む限り、グラウザーはこの形式の導入にあたっては、よくあるミステリーの一冊を書きあげて、そこで「聖なる精神病院」について少しばかり辛辣な皮肉をきかせる程度の心積もりであったらしいことが想像される。ところがすべては予想外の違った方向へと、いわば化学変化を起こしたのである。そこで起こった出来事をグラウザーが十分に言語化できるようになるのは、1937年1月に長編小説『狂人が支配する』^{マット}が実際に書物となって出版されてからのことである。

3 「夢想の風」が吹く探偵小説のために ——『『探偵小説のための十戒』に対する公開状』

グラウザーは1937年3月25日、『チューリヒャー・イルストリールテ』紙の編集部に、探偵小説についての理論的テキスト、「『探偵小説のための十戒』に対する公開状」(Offener Brief zum <Zehn Gebote für den Kriminalroman>)を送っている。前月に同紙に掲載されたミステリー作家S・プロクホフのエッセイ『探偵小説のための十戒 (Zehn Gebote für den Kriminalroman)』^{マット}に対して書かれた反論の文章である。¹¹ 少し長くなるが、その中から本論にとって重要な箇所を引用しよう。

探偵小説は、おのれの内に潜んでいるこの遊戯性を通じて、サロン向けの兄弟分と親縁関係にあるのですが、この兄弟分は「長編小説」と名乗り、芸術作品に数え入れられることを要求しています。そしてこの芸術作品は読まれていて、ついには技巧品、凝った造り物にまで成り上がりました。ある種の好事家、スノップたちの関心事となったのです。

そこで扱われるのはもっぱら魂の分解です、あるいはまた、作家たちは哲学、心理学、形而上学に淫してしまい、厳として存在しているところの長編小説の主たる要請、すなわち、虚構を紡ぐこと、物語ること、人間を、彼らの運命を、彼らがその中で生きている雰囲気を描くこと、は忘れてしまいました。[・・・]

長編小説が緊張を非芸術的なものと非難したせいで、その軽蔑された兄弟分である探偵小説は成功をおさめました、そしてその成功はある種の人々の眼には成り上がりの印と映ったのでした。[・・・] 探偵小説は長編小説を構成する諸特質の中でも唯一、緊張のみを保持しています。これは特殊な緊張です。探偵小説は少しばかり虚構を紡ぎもします、しかし、安全な道を踏み外すことはないのです。そして探偵小説はもっとも大切なものを放棄します、つまり、人間を描くこと、そして人間の運命との戦いを描くことです。人間とその運命！探偵小説は意識的にこの芸術的特性を放棄しました。

[・・・] 探偵小説のストーリーは一頁半もあれば十分に語れます。残りのタイプ原稿 198 枚は埋め草です。さて問題は、この埋め草で何をするかです。[・・・] ある作家の書くものの中にわたしは全探偵小説において見つけることができないでいたものを発見しました。作家の名前はシムノンです、彼は、何人かの先行者がないとは言わぬものの、これほどの情熱を持ったものはなかった、あるタイプを生み出しました。メグレ警部です。平凡な捜査官であり、分別があり、いくぶん夢想家です。主たるテーマは犯罪事件そのものではなく、犯人暴露、謎解きでもありません、そうではなく人間、わけでも彼らがその中で動いている雰囲気が主題なのです。わけでも雰囲気です。[・・・] 筋の展開は太鼓判を押された処方箋に従って作られているとはいえ、実のところ、謎解きはどうでもよいのです。印刷された黒いインクの行間にはあの夢想の風が吹いています、この上なくささやかなもの、ちっちゃなものを生に、時として幽霊じみたものでもある生に目覚めさせるあの光が差し込んでいます。犯人？——犯人は、日常の生活においてもそうであるように、どこにでもいる人間です。そしてそれが暴かれることはまったく重要ではないのです、終わりににはホッと一息も、大団円もありません、物語にはそもそも終わりはないのです、それは終わり、生の小休止ですが、生そのものは流れ続けます、非論理的に、かつさうように、悲しく、そして同時にグロテスクに。¹²

引用文の前半の二つの段落でグラウザーが批判しているのは、同時代の文学市場における「高尚文学」としての「長編小説」と「通俗文学」としての「探偵小説」の分化と考えて良いだろう。芸術作品としての地位に安住する前者はともすれば「心理小説」、「哲学小説」となり、虚構の物語を展開する活力を失ってしまっており、一方、謎の解明に向けての筋の展開にもっぱら集中する后者は、小説的緊張を「手に汗握るサスペンス」に還元してしまっている。そのいずれにおいても、人間、そして、人間と運命の闘いが描かれていない。しかし、グラウザーに言わせればこれこそが小説の使命である。

とはいえ、この文章を探偵小説と長編小説をめぐる一般的議論として読むのはミスリーディングだろう。「公開状」という文脈からも明らかなように、ここでグラウザーは、ミステリー作家プロクホフのジャンル囲い込みのポーズに対して——これは同時代においてプロクホフひとりに限られた振舞いではなかった¹³——そこで設定されようとしている境界線を侵犯しうる探偵小説のポテンシャルを論じようとしているのであり、そこで背中を押しているのは、むろん、すでに刊行したシュトゥーダーもの二作での実作経験である。その意味で、ここでの議論は——後半でのシムノン論も含め——グラウザー自身による自作「探偵小説」についての自己解説として読まれるべきものである。

その上であらためてポイントを押さえておこう。まず明らかなのは、「探偵小説のストーリーは一頁半もあれば十分に語れます」と語るグラウザーは、「探偵小説」を謎解きという目的に奉仕するだけのものと考えてはいないこと、むしろ残りの「198枚」こそ重要だと考えていることである。そして注目すべきは、ストーリーの余白を埋めるものとして、グラウザーがここで1931年の手紙に出て来た「雰囲気 (Atmosphäre)」という言葉を繰り返し用いていることである。そして、当時の手紙では、克服さるべき短所を指示していたこの言葉は、今ではまさに探偵小説にとって最も大切な眼目を指すキーワードに変わっている。「人間、わけても彼らがその中で動いている雰囲気 が主題なのです。わけても雰囲気です。(die Menschen und besonders die Atmosphäre, in der sie sich bewegen. Besonders Atmosphäre)」そしてもう一点、注目すべきはそこに「夢想 (Traum)」という語が登場することだ。「[・・・] 実のところ、謎解きはいつでもよいのです。印刷された黒いインクの行間にはあの夢想の風が吹いています。(Man bleibt gleichgültig, im Grunde, gegen die Lösung [...] Aber es weht zwischen den schwarzen Druckzeilen jene Traumluft...)」

この探偵小説論には、実作、とりわけ『狂人が支配する』^{マット}を書くことではじめてグラウザーに訪れた認識が書きこまれている。グラウザーは、「謎解き」という目的に向かって全体を目的論的に構成することを旨とする探偵小説という枠組みを、現に用いてみたことで、自分自身、予想してもいなかった長編小説の作法を発見する。それは、目的地へ向かって線路を走る列車に乗りこんでしまうことで、あとは思う存分に夢想到に耽るという書き方だった。それまではストーリー展開に寄与しない逸脱として、悪癖とみなされるほかなかった「雰囲気描写」への傾向はいまや十全に肯定され、グラウザーのペンはなにはばかることなく、無意味、無価値としか思えぬ<生>の偶景を拾い始める。グラウザーの精神病院を舞台とするミステリーの行間においては、文書化作業の中で抹消された、「権利を奪われた者たち (Entmündigte)」、すなわち、法的主体として語る言葉、「口 (Mund)」を奪われた者たちの「夢」もまた、存在する権利を取り戻すのである。

以下の章では、長編小説『狂人が支配する』^{マット}のテキストに即しつつ、「探偵小説」という形式が、精神病院という場の叙述にいかなる可能性をもたらしたのか、具体的に論じよう。

4 「文字言語」による<生>の抹消に抗して——『狂人が支配する』^{マット}

精神病院という場を、その中で人びとが生き、活動している「雰囲気」とともに、かつ、全体として機能しているシステムとしても描くこと、これは非常に困難な課題である。たとえ書き手自身がその場を生きた経験があったとしても、容易なことではないだろう。精神病院は少なくとも「医師」—「看護人」—「患者」という権力関係においてまったく非対称な三者から構成されており、いずれの立場も特有の視角とともに盲点をも抱えこんでいるからである。例えば、グラウザーの「精神病院日記」は、まだ現場に投入されて歴史の浅い「精神分析」の被検体験にも触れた、リアリティーあふれる現場報告ではあるものの、あくまでも患者という立場で経験した精神病院の、一人称による記録である。¹⁴ 第二章で触れた『狂人の人形芝居』^{マット}も、「マット」によって精神病院という場全体を統べるものの形象化には成功してはいるものの、医師の回診のように、諸場面を並置し、そこに患者としてのグラウザー自身も登場人物として組み込むというやり方では可視化できる範囲は限られていた。精神病院における禁忌を破った女医—看護士の恋愛事件を描いた短編『女医博士』も、病院の規律システムに一瞬のゆらぎをもたらしたエピソード

ド以上のものにはなっていない。

そこに新たな書き方をもたらしてくれたのが「探偵小説」という形式である。すでに触れたように、事件の真相解明に向けての展開が約束事となっている探偵小説は最初から筋の展開に関しての大枠を与えてくれる。そして、主人公となる探偵は、通常、外から現場にやってくる。彼は外部者の視線で、犯行が行われた場の空間配置、人間関係、その背後にある愛憎、欲望、権力構造に至るまで、およそ真相解明につながりうることならなんでも微に入り細に入り知ろうとするだろう。システムの外部者でありながら、システム内部の諸関係を知り尽くそうとする探偵が謎解きに向かって歩を進めていく探偵小説の形式は、「精神病院」という容易には見通し難い場を踏破するための叙述を可能にしてくれるのである。

事実、院内のラドゥーナー博士宅に寄寓して捜査を続けるシュトゥーダーは、数日のうちに、医師、看護人、患者らはもちろんのこと、医師の家族から守衛、夜警、料理女、病院関係者の訪れる居酒屋の亭主に至るまで、数え切れぬほどの人びとと、情報、雑談、果てはパンチ・キックまで交わした結果、院長の私生活の乱れ、院内序列第二位のラドゥーナー博士と院長との治療方針をめぐる対立、看護人たちの党派性、看護婦と患者の恋愛沙汰、個々の患者たちのいずれ劣らぬ個性的な症状など、院内生活諸事情を知るようになる。いや、知るだけではない。作中繰り返し「詩人肌」とも「センチメンタル」とも揶揄されるシュトゥーダー刑事は、ラドゥーナー夫人、赤毛の看護人ギルゲン、マットの詩を歌う傷痕軍人患者シュールらにはあからさまに好感を抱き、失踪院長に対してはその孤独感を追想し、ラドゥーナー博士の精神分析談義にはシンパシーから吐き気に至るまで愛憎入り混じった感情をかきたてられ……といった具合で、およそ探偵役には不適格なほどに院内生活の細部に感情的に反応する。それゆえ読者のもとには、客観的な真相解明という本来の目的を見失わせるほどに、複雑な内面を抱えたシュトゥーダーの主観的感觉を通じて、院内の諸々の「雰囲気」が押し寄せてくるのである。そう、通常の探偵小説とは異なり、次第に視界が開けていくというのではなく、次第にその世界にのめりこんでいくというのが、シュトゥーダー刑事の捜査作法であり、作家グラウザーの小説作法なのである。

その作法を通してシュトゥーダーそしてグラウザーは、精神病院という場全体を捉えている網のようなものを可視化しようとするのだが、以下では、そのような細部の叙述の中から、シュトゥーダーが異様なまでに拘泥する、ラドゥーナー博士の「言葉の身振り」に、論点を絞ろう。

『^{マッ}狂人が支配する』の主題、それは、従来の探偵小説の枠組みに従っているなら、ラントリンゲン精神病院院長ボルストリ失踪事件および患者ピーターレン脱走事件の謎解きである。そうであればこそ、第一章冒頭、早朝の電話でシュトゥーダー刑事は叩き起こされ、朝食も食べぬまま精神病院に向かうことになる。そして迎えるラドゥーナー博士が姿を現すとともに、シュトゥーダーの中で——そして読者の中で——早くも謎解きに絡む具体的な関心が動き始める。

この第一章にはなぜシュトゥーダーの出動が要請されたかを説明するために、前史にあたるものが書きこまれているのだが、それによれば、かつてウィーンでシュトゥーダーは若き日のラドゥーナーに出会っていた。それまでの懲罰一辺倒の少年院の在りようを変えるべくリベラルな改革に取り組んでいたある院長の下で、青年ラドゥーナーはボランティアとして働いていた。ナイフをかざした不良少年を暴力に頼らず、落ち着かせたあの冷静で好ましい態度をシュトゥーダーは懐かしく想い出す。ただ、今回どうも引っ掛かるのが、以前は感じなかったラドゥーナー博士の不自然なしゃべり方、そして時おり浮かぶ、貼り付いたような仮面だった。

ラドゥーナー博士のお好みの言葉は「ちなみに」であるらしかった。それに奇妙なスイスドイツ語をしゃべった——東部スイス方言、その間に標準ドイツ語の単語が混じる。素朴とは到底言えないしゃべり方だった。仮面を思わせる微笑みも少々違和感を与えるものだった。それは顔の下半分を覆い頬骨まで達していた。その部分は強張っていて、両眼そして非常に高くて広い額だけが生きているようだった。

Dr. Laduners Lieblingswort schien <übrigens> zu sein. Auch sprach er ein merkwürdiges Schweizerdeutsch – Ostschweizerisch, dazwischen schriftdeutsche Worte. Seine Sprache war gar nicht urchig. Ein wenig befremdend war sein Lächeln, das an eine Maske erinnerte. Es bedeckte den unteren Teil des Gesichtes bis zu den Wangenknochen. Dieser Teil war starr – und nur die Augen und die sehr hohe und sehr breite Stirne schienen zu leben ... (M.11)¹⁵

ひとつ、それにしても奇妙なことがあった。あの頃、ウィーンではこの医師はまだあの仮面の微笑はつけてはいなかった、まるで鏡の前で

貼りつけて来たかのようなあの微笑は……。それからこうも考えた、ことによるとこの印象は間違っているかもしれない、みずからをコントロールできないだけなのかもしれない、しかしそれでも、ラドゥーナー博士の両眼には不安がうずくまっているように思われてならなかった。

Eins war immerhin merkwürdig: Damals in Wien hatte der Arzt noch nicht das Maskenlächeln getragen, das Lächeln, das aussah, als sei es vor einem Spiegel aufgeklebt worden... Und dann: Vielleicht war der Eindruck falsch, kontrollieren ließ er sich nicht, aber es schien doch, als hocke Angst in den Augen des Dr. Laduner. (M.15)

ラントリンゲン精神病院における席次第二位の医師であり、ボルストリ院長と真っ向から対立していたことがこの後すぐに明らかになるラドゥーナー博士は、動機の観点からしても容疑者の筆頭にも挙げられうる人物であり、この人物の声音、表情の見通し難さは、この第一章の時点ではいかにも謎解きに関わってくる重要な要素に思えるかもしれない。しかしながらシュトゥーダー刑事がラドゥーナー博士の身振りに寄せる関心は、明らかに行き過ぎている。それは筋の展開を阻害するほどのものであり、小説の舞台となっている精神病院にちなんでいうなら、まさに「神経症的」といってよい域に達しているのである。「なぜ、このおふざけには無理があるのだろうか？・・・わざとらしいのだろうか？(Warum klang nur das Witzeln so gezwungen? ... Gekünstelt?)」(M.16)、「ラドゥーナー博士は第一音節にアクセントを置いた。(Dr. Laduner betonte das Wort auf der ersten Silbe.)」(M.16)、「『すべりこむ』という語を医師は書き言葉のドイツ語のように発音した。(＜Schlüfen＞ sprach der Arzt wie ein schriftdeutsches Wort aus.)」(M.16f.)、「予測不可能性！・・・関連！・・・それに第一音節にアクセントの『たーしかに』。(＜Imponderabilien＞! ... <Konnex＞! ... und <ge-wiß>, auf der ersten Silbe betont.)」(M.17) シュトゥーダーの言葉の身振りへのこだわりはさらにとどまるところを知らない。

「この人のしゃべり方ったら、なんて奇妙なんでしょう！」夫人は謝った。どこかおかしかった・・・ラドゥーナー博士は奇妙なしゃべり方をしたわけではまったくなかった。そして夫人のコメントも偽装工作だった、というのも、このふざけたしゃべり方が変に響くということを彼女が指摘しておく必要があった、ということなのだから。[・・・] 彼女

がスイス方言では普通使わない「奇妙な」という言葉を使ったのも、どこかおかしいという印象をいっそう強めたのである。

«Er redet so komisch!» entschuldigte sie sich.

Es stimmte nicht ... Dr. Laduner redete gar nicht komisch. Und auch die Bemerkung der Frau war ein Täuschungsmanöver, denn sie mußte merken, daß diese witzelnde Art zu erzählen falsch klang. [...] Auch daß sie das im Dialekt sonst nicht übliche <komisch> brauchte, bestätigte eigentlich den Eindruck, daß irgend etwas nicht stimmte... (M.22)

以上、立て続けに引用したのは、第二章において、シュトゥーダーの語調の不自然さ、さらにはそれを誤魔化そうとするラドゥーナー夫人の言葉の不自然さにまでシュトゥーダーがこだわっている箇所数例であるが、ここでの違和感は、①スイスドイツ語／標準ドイツ語の差異 ②アクセント位置 ③専門用語の使用——この三点に関わっている。とりわけ目立つのが、「標準ドイツ語」と「スイスドイツ語」の差異であるが、これについては、ベルン州警察シュトゥーダー刑事のキャラクター設定、さらには郷土作家グラウザーならではの地元言葉へのこだわりとして納得する読者もいるかもしれない。事実、グラウザーの同時代における成功はまさにそうした受容によるものだった。発表当時、シュトゥーダー刑事シリーズはドイツ語圏スイスに根を下ろした探偵小説を提供してくれる作品として受け取られたのであり、とりわけ、1939年、続いて1946年に映画化された『シュトゥーダー刑事 (Wachtmeister Studer)』、『^{マッ}狂人が支配する (Matto regiert)』(両作品ともに、監督L・リントベルク、主演H・グレトラー)は明らかに郷土映画的な脚色のもと、ナチスドイツと同盟国に四囲を囲まれた戦時経験を背景に、「精神的国土防衛」の文脈において受容されたのである。¹⁶ しかしながら、ここでシュトゥーダーは郷土スイス的な語り口の不在を嘆いているわけではないし、繰り返して言えば、ここでの拘泥ぶりは探偵小説の謎解きに有意な限度をはるかに超えている。このマニアックなこだわりの含意を理解するための鍵は、おそらく、同じ第二章に登場する次のくだりにある。

「というのも、ピーターレン、それは院長でもなければ、看護人でもない、それは任意の人間ではないのです。ピーターレン、それは実物教授用標本だったのです。」

シュトゥーダーが気になったのは、ラドゥーナー博士が過去形を用い

たことだった。——「だったのです。」これではまるで死人について話しているみたいだ・・・。

«Denn Pieterlen, das war kein x-beliebiger Mensch. Pieterlen, das war ein Demonstrationsobjekt...»

Es fiel Studer auf, daß Dr. Laduner die Mitvergangenheit brauchte: <Pieterlen war ...> So, wie man sonst nur von einem Toten spricht ... (M.24)

おかしいのは「過去形」の使用だけではない。このラドゥーナー博士の発言が奇妙なのは、ピーターレンのことを「任意の人間 (x-beliebiger Mensch)」ではないと言いながら、では唯一的な存在であると主張するのかと思えばそうでもなく、つまるところ「実物教授用標本 (Demonstrationsobjekt)」という、どこからどうみても固有性とは無縁の形容にはめ込んでいる点にある。ここでの彼の発言はさまざまなレベルにおいて、到底、生きている存在に対するものとは認め難いのである。

ここまでの引用箇所から明らかだろう。シュトゥーダーが問題にしているのは、ラドゥーナー博士における、「生きている存在」に対する態度と、「死者 (ein Toter)」、「対象物 (Objekt)」を扱う態度との常識ではありえない混乱、区別の消失なのだ。であればこそ、「過去形」の問題、「専門用語」の問題と、「標準ドイツ語」、いや正確には「文字ドイツ語 (Schriftdeutsch)」の問題とが重なるのである。¹⁷「スイスドイツ語 (Schweizerdeutsch)」と対で用いられる際、「標準ドイツ語」と訳されることの多い<Schriftdeutsch>という単語は、字義通りには「書き言葉のドイツ語」であり、本来は「口頭の話し方 (Mundart)」と対で用いられるべき言語であるが、ここでのシュトゥーダーのこだわりは、まさにこの字義通りの意味に関わっている。¹⁸ すなわち、そこでは生ある存在を「文書 (Schrift)」と化してしまうドイツ語、という字義通りの意味が強調されているのであって、その意味において、ここでの言葉の表層のレベルに関わる神経症的なこだわりは、「長編小説」としての核心テーマ、すなわち、<「文字言語」による「生」の抹消>の問題と関わっているのである。

その意味で、次の引用箇所は、この作品を解読するための鍵となるくだりである。作品の終盤において、患者ピーターレンに対するラドゥーナー博士の姿勢についてシュトゥーダーは頭の中でひとり呟く。

ピーターレンとは何だったのか？ 一束の書類だ。そして、ラドゥーナー博士の言葉がこの書類の束を蘇生させたのだ。

Was war Pieterlen gewesen? Ein Aktenbündel. Und Dr. Ladunas Worte hatten das Aktenbündel zum Leben geweckt. (M.215)

この命題の真偽については、それを口にしたシュトゥーダー自身のみならず、これを読む読者も、テキストの細部に基づきつつ、慎重に判断を下さなくてはならないだろう。次章では、このピーターレンが「書類の束」の形で登場する、特権的な章の分析を通じて、この難題に取り組むことにしたい。

5 「実物教授用標本ピーターレン」、あるいは、「精神分析医に対して分析家の役を演じてみる」こと

26章から構成されるこの小説の第10章にあたる「実物教授用標本ピーターレン」(M.89-112)の扱いを、グラウザーは執筆最終段階に至ってもなお、ひどく気にしていた。1936年5月に編集者J・ハルパーリンに送った手紙の中でも、グラウザーはこの章を削除しろと言われなかったことに安堵の気持ちを表明している。なにしろ原稿を送付した際、この章だけは頁数を記さなかったほどに、全体構成の中での位置づけに迷いがあったのである。¹⁹ その心配には十分な理由があった。この章で繰り返し引用されるピーターレン関連の病歴書類は、ミュンジンゲン精神病院に収容された、とある患者に関わる現実の資料に基づいていたのである。

1931年、ミュンジンゲン精神病院に収容されていたグラウザーは、ある患者の関係書類を打ち込む作業において——タイピングの腕を見込まれてグラウザーはこうした作業を手伝っていた——異例なことに自分用の写しを一部作成した。グラウザーの関心を引いた患者R・Pの履歴は以下のようなものだった。5歳で母親と死別、ヴィンタートゥール近郊の町で時給80ラッペンの仕事に従事、ショーペンハウアー、ニーチェ等への関心、嬰兒殺しで逮捕、長年にわたる精神病院生活・・・すぐに気づくだろう、グラウザーの生に酷似しているのである。グラウザーは4歳で母と死別し、ヴィンタートゥーアにはR・Pが子殺しを犯した翌年に半年間ほど住んでいた。読書対象もびったり重なっているし、時給60、70ラッペンの貧困生活も経験している。精神病院、刑務所などでの収容施設で過ごした期間もほぼR・Pのそれに匹敵していた。さらに付け加えれば、スイスでは1928/29年に「劣等者非生殖法」が定められ、その対象には精神病患者、さらに薬物中毒患者も挙げられていた。嬰兒殺しも他人事とは思えなかったはずである。²⁰ R・Pの履

歴に遭遇したグラウザーが、不意に自分自身の生が他人の生として、しかも、官庁言葉・医学用語から構成された文書と化して眼の前に置かれたかのような、夢中の如き奇妙な感覚を覚えたとしても不思議はない。ともかくも、グラウザーはこの文書を手元に残し、来るべき精神病院小説に編み込むことを決意した。

このプロセスを考えるなら、患者ピーターレンと著者グラウザーを重ねて読むことには十分に慎重にならないといけないだろう。〈他者への疎外〉、〈文書への疎外〉、この二重の疎外感を伴いつつ現前している異質なテキストの断片を小説中に配置する行為を通して、ここでグラウザーは精神病院における自分自身の疎外体験を、きわめて高い虚構度において省察しているのである。冒頭で失踪事件が伝えられて以来、一度も生身では姿を現していないピーターレンがひたすら文書の切れはしとして登場する第10章「教授用実物標本ピーターレン」は、「警察」、「精神医学」という巨大な文書化権力と小説家グラウザーの想像力が矛を交える主戦場となっているのである。

「これを読んでみてください」という、シュトゥーダーに対するラドゥナー博士の促しの言葉とともに始まるこの章は、ピーターレンの書類を引用しながら、ラドゥナーが精神医学、精神分析についての持論を語り、それをシュトゥーダーが拝聴するという形式で進んでいく。シュトゥーダーは論戦は挑まない。「いつもそうで、思考に鋭さを求めようとすると、考えていることはぼやけて輪郭を失い、まったく、ひどく関連がなくなってしまう」(M.113) シュトゥーダーに勝ち目はないからである。しかし、シュトゥーダーには別の武器がある。聴くこと、それも言葉の内容ではなく、言葉の身振りを聴き分けることである。「シュトゥーダーは耳を澄ましに澄ました……正直なところ、患者ピーターレンのケースは、その内容よりも、それが語られる語調の方が興味深いものだった。」(M.94) シュトゥーダーはこの、ひどくプリミティヴな武器でもって、「分析的英知」の所有者ラドゥナー博士が「書類の束から蘇生させる」ピーターレンの像の真正性を検証していく。

素直に話を聞いていく限り、医師ラドゥナーの患者ピーターレンに対する態度は、まずは、非常に「人間的」なものであるように思われる。

おわかりでしょう、シュトゥーダー、この男の運命にわたしは関心を持ったのです。というのも、分裂的な性格にもかかわらず——私は分析的英知のおかげでこのことを認めないではいられなかったのですが——ピーターレンはきちんとした人間だったのです。それで、彼が後見人

になって欲しいといってきたときに私は受け入れることにしたのです。
 Sie begreifen, Studer, daß mich das Schicksal dieses Mannes beschäftigt hat.
 Denn trotz des schizoiden Charakters, den ich kraft meiner diagnostischen
 Weisheit feststellen mußte, war Pieterlen ein anständiger Mensch. Und als er
 verlangte, ich solle sein Vormund werden, habe ich angenommen. (M.104)

たしかにピーターレンの価値を認め、「後見人」を引き受けている彼の態度は「人間的」と言えるだろう。しかし、ラドゥーナーは精神科医である。その立場も考慮に入れた場合、このピーターレンに対する対応は適切だろうか？ グラウザーは精神医学に疎い読者のために、判断材料となる参考文献を作中に引用してくれる。四章ほど後の「紙入れ」の章で、シュトゥダーはラドゥーナー博士の書斎の棚から、背の部分がはみ出した一冊を何気なく手にとると、「印刷された文字像を意味と結びつけて理解することがまだ難しい一年生の小学生のように ([...]wie ein Schüler der ersten Klasse, der noch Mühe hat, das gedruckte Wortbild in seiner Bedeutung zu erfassen.)」(M.142) だどどしく読み上げる。「精神療法専門医は患者の運命に情緒的に関与している。そこからして患者に対する生な対結合の危険が生じる。医師—患者の関係が友情のレベルにずれかねないのである。そうすると勝負は医師の負けである。なぜなら、断じて忘れてはならないことだが、いかなる精神療法も闘いの形式において演じられなければならないからである。すなわち医師と病気の間の闘いという形式において。この闘いを勝利に終わらせようとするなら、医師は手を貸してやる友人であってはならず、一貫して指導者であることをやめてはならない。ひるがえってそれは、距離を保てなければならないことなのである」(M.142、強調はグラウザーによる)。本のこの箇所にはアンダーラインが引いてある。さらに意地の悪いことに、グラウザーはこの文章をよりによって、ラドゥーナー博士のモデルであるM・ミュラーの実際の著作『精神病の診断と療法』からそのまま抜き出して引用してもいる。²¹ この記述に照らしても、「きちんとした人間 (ein anständiger Mensch)」という市民道徳的、主観的判断を根拠に、「後見人 (Vormund)」、すなわち他者の「口 (Mund)」を占有する者になるというのは、行き過ぎた結びつきなのではないかという疑問が生じて当然だろう。少なくとも難解な文章をやっとのことで読み上げてみせたど素人シュトゥダーが数章先で下す判断はこうである。「距離！ ラドゥーナー博士はいつも距離を守っていたのだろうか、どうもそうじゃないらしいぞ。そうでなければアンダーラインなんて引きっこない。」(M.143)²²

耳の人シュトゥーダーの発見はさらに続く。

「[[...] ^{インボンデラビリエン}予測不可能性[...]」

(シュトゥーダーは微笑み、考えた——先是測り難してことだな[...])

「[...] がそこでは大きな役割を果たします。そしてこの^{インボンデラビリエン}予測不可能性という言葉で私が理解していることは、普通は運命という言葉が意味していることなのです。」

«[...] Imponderabilien...»

Studer lächelte, dachte: <Das heißt also Unwägbarkeiten...>

«... spielen da eine große Rolle. Und unter Imponderabilien verstehe ich eigentlich das, was man sonst das Schicksal nennt». (103)

意味内容ではなく、言葉遣いにひっかかっているだけに、ここは要検討箇所である。率直に問うてみよう。なぜラドゥーナー博士は普通に「運命」と、せめてドイツ語で「先是測り難い」と言わず、変てこな響きを持つラテン語由来の専門用語を用いるのだろうか。むろん、先だっのラドゥーナー夫人同様、博士は偽装工作も忘れてはいない。「つまるところ、私は医者です、魂の医者です、これは外の世界で少々嘲りも込めて口にされることで、というのも外来語を用いる私たちは時として少しばかり滑稽であるからですが。これはまあどうでもよいことです[...]」(101f.) しかし、謎解き以上の動機に突き動かされているシュトゥーダー刑事——そして作家グラウザー——にとっては、ラドゥーナーの外来語使用、専門用語使用は「どうでもよい(nebensächlich)」ことではまったくない。こうした専門用語の日々の使用は、生に対する精神分析医のメタレベル性をたえずあらたに保証する、すぐれて行為遂行的な言語使用法なのである。むろん、シュトゥーダーの演じてみせた、いかにも稚拙な専門書の朗読は、この特権性をあえて際立たせるための——作家グラウザーの指示による——ほとんど確信犯的な演技である。²³

シュトゥーダーがこの章で拘泥するのは、外来語、学術用語だけではない。ごく日常的な一文に対しても、彼はしつこくこだわっている。

「彼は妻をかほどにも権力下に置いていた」とラドゥーナーは抑揚のない声で読んだ、がしかし、そのアクセントの置き方はきわめて異様なもので、シュトゥーダーは少々ざくりとした。[...] シュトゥーダーはぼうっとしていた、いくつかの文章が宙に響いてはかき消えた[...]。

«Er hatte seine Frau dermaßen in der Gewalt», las Laduner mit eintöniger Stimme, und doch war die Betonung so sonderbar, daß Studer ein wenig stutzte. [...] Studer war zerstreut, ein paar Sätze verhallten [...]. (100)

また奇妙なアクセントが確認できた、以前ラドゥーナーがこう読んだ時と同じだ——「彼は妻を完全に権力下に置いていた」・・・しかし、ラドゥーナーは急いで先を続けた、まるで何かを拭い去ろうとするかのように。

Wieder war die merkwürdige Betonung festzustellen, wie früher, als Laduner gelesen hatte: <Er hatte die Frau ganz in der Gewalt> ... aber dann fuhr er rasch fort, so, als wolle er etwas verwischen. (106)

シュトゥーダーはなぜ、二度にわたって、このほぼ同一の文章の読み方に過敏に反応したのだろうか。「彼は妻を[・・・]権力下に置いていた。(Er hatte die Frau [...] in der Gewalt.)」その理由はいずれの場合にもはっきりとは書かれていない。しかし、そこに何か拭い去られたものの痕跡を、俗な言葉で言えばおそらくは「良心の呵責」にあたるものを、シュトゥーダーはラドゥーナーの語調に聴きとっている。あるいはここで、グラウザーの「精神病院日記」における次のような一行を想起してもよいかもしれない。「ときには精神分析医に対して分析家の役を演じてみるのもよいのです。(Es ist gut, selber bisweilen dem Psychiater gegenüber den Analytiker zu spielen.)」²⁴

自室に戻ったシュトゥーダーはあらためて、最後まで気になってならなかったこのラドゥーナーの語調の「分析」に取りかかる。

「彼は妻を権力下に置いていた・・・」

シュトゥーダーはあの文章を真似てみた・・・ラドゥーナー博士は「権力」にアクセントを置いていた。権力！ 誰かを権力下に置くこと・・・誰を？ ピーターレンを、ラドゥーナー博士は権力下に置いていた。他にも誰かを？

そこであの金髪の若者の姿が浮かび上がる。彼はベッドに横たわり、頬には涙が流れていた。その頭上のところではラドゥーナー博士が椅子に腰かけて煙草を燻らせていた。

«Er hatte die Frau in seiner Gewalt...»

Studer versuchte, den Satz nachzusprechen ... Dr. Laduner hatte den Akzent

auf <Gewalt> gelegt. Gewalt! Jemanden in der Gewalt haben ... Wen? Den Pieterlen hatte Dr. Laduner in der Gewalt gehabt. Sonst jemanden?

Da taucht das Bild des jungen blonden Mannes auf: Er lag auf dem Ruhebett, und Tränen liefen über seine Wangen. Ihm zu Häupten saß Dr. Laduner und rauchte. (116)

ここでもシュトゥーダーの方法はプリミティヴだ。彼がやっていることといえば、気になった文章を「真似てみる (nachsprechen)」こと、そしてその際に、まるで積み木を置き換えていくように、目的語と主語の部分に次々名詞を入れていくことにすぎない。「彼は (er)」のところに「ラドゥーナー博士は (Dr. Laduner)」を、「妻を (die Frau)」のところに「誰かを (jemanden)」、さらには「誰を? (wen?)」、続いて「ピーターレンを (den Pieterlen)」、さらには「他にも誰かを? (sonst jemand?)」を代置していく。まさに小学校低学年の授業さながらである。しかし、対象をいくらでも交換していきながらも維持され続ける、この非対称な権力関係こそ、探偵小説の衣をまとったこの長編小説の関心がたえずめぐっている真の謎なのである。単純な置き換え作業の先に浮かび上がったのは、かつてシュトゥーダーの垣間見た、精神分析の現場の原風景とも言えそうな光景——長椅子に身を横たえ涙を流している患者の枕元で、悠然と煙草を嚔らせる分析医の姿だった。

反精神医学的小説として、『^{マット}狂人が支配する』を読む場合、「実物教授用標本ピーターレン」の章には比類なく重要な役割が与えられることになるだろう。患者ピーターレンと医師ラドゥーナーの関係には、グラウザーと彼の苦痛に満ちた生の最良の理解者であり担当医師でもあったM・ミュラーとの関係が下敷きになっているだけでなく、さらには精神医学における非対称的な権力関係の問題が凝縮されて書きこまれている。作家グラウザーは、シュトゥーダーが一瞬、素朴に確信してしまうように、ラドゥーナー博士の人間的な姿勢に、文書化されてしまった生を蘇生させる可能性を見出し、賞揚しているのではない。そうではなく、あたかもそうしているかの如く振舞っているラドゥーナー博士の片言隻句、その言葉の身振りの揺れに耳を澄まし続けるシュトゥーダーを描くことにより、「文書化」と「文書からの蘇生」の双方を意のままにするかのような精神科医、精神医学の特権的なありようを可視化しようとしているのである。

6 「^{マット}狂人が姿を現す」、あるいは、「謎解きの失敗」が可視化してくれること

グラウザーは1931年、M・ミュラーに宛てた手紙で書いている。

[...]ほんの二言、三言発するだけで、あなたはいつも、わたしを口封じできるのです[...]

[...] mit ein paar Worten gelingt es Ihnen immer, mich mundtot zu machen [...].
(Br.1/358)

この「口封じ (mundtot)」という語は痛切である。そこには患者グラウザーと精神科医M・ミュラーの関係のすべてが凝縮されているといってもよい。それは、長編小説『^{マット}狂人が支配する』では、例えば、次のようなシュトゥーダー刑事の言葉に変換されて登場する。

この男はそうした非難に対してもわたしの口を封じる答えを知っているだろう・・・勝ち目はない・・・

Der Mann wird auch auf diese Vorhaltungen eine Antwort wissen, die mir den Mund verschließt ... Es ist hoffnungslos ... (M. 223)

個人レベルで言うならば、グラウザーはこの長編小説を担当医M・ミュラーに抗して書いている。あるいは、別のレベルで言えば、精神病院という組織、精神医学という言説に抗して書いている。そしてこの関係は、この探偵小説の中では、ピーターレンをはじめとする「患者」と「医師」ラドゥーナーとの関係として描かれるだけでなく、「刑事」シュトゥーダー対「容疑者」ラドゥーナーの対抗関係の形をとることになる。単身、精神病院に乗り込み謎解きに挑む主人公シュトゥーダーがいわば書き手グラウザーを、仮面のような謎めいた微笑を浮かべるラドゥーナー博士が精神医学を体現している、というわけである。そうである以上、メインストリームの探偵小説のように、謎解きをする探偵の側の勝利で終わるという展開は不可能だろう。患者が医師もしくは精神医学に勝つなどということはまずあり得ないことだからである。実際、もしそのような終わり方をしていたとすれば、それは——たとえ探偵小説として成功していても——グラウザーの収容経験から生まれた反精神医学小説としてはリアリティーを欠いた失敗作に終わっていたに違いない。

実際、この小説での「シュトゥーダー刑事」対「ラドゥーナー博士」の対抗関係——これは繰り返し「力比べ（Kraftprobe）」（M.71）という言葉で表現される——はシュトゥーダーの敗北に終わる。最後の三章のうち、「7分」、「45分」と題された最初の二つの章はいずれも、あたかもシュトゥーダー刑事の謎解きを披露する場として用意されたかのように始まる。彼はラドゥーナー夫妻を前に、自分は看護師ギルゲンの家にピーターレンが潜んでいることを突き止め、そこで患者ヘルベルトが看護人ユッツラーを撃とうとしている現場に踏み込み、妨害する守衛ドライバーを一撃でノックアウトし、ヘルベルトから拳銃を取り上げ、彼こそがラドゥーナー博士を助けるためにボルストリ院長を鉄梯子から突き落としたのだという自白を引き出し、続いて、精神病院に引き上げてくる途中で、不幸なことにヘルベルトはドライバーに川に突き落とされ溺死したことを物語る。ドライバーはラントリンゲンへ連行され、翌日ベルンに護送される予定であり、かくして、不幸なアクシデントはいくつか起こったものの、これで院長殺人事件の真相は明らかになった……。もしここで終われば探偵小説の大団円である。ところがそこで電話が鳴り、護送中、逃亡をはかったドライバーが事故死したとの知らせがもたらされる。すると、ラドゥーナー博士は例の微笑を浮かべ、勝ち誇ったように言う。「最初は院長、[・・・]、二番目がギルゲン、[・・・]、三番目がヘルベルト・カプラウン、[・・・]、四番目が守衛のドライバー、[・・・]、すんでのところで私が五番目になるところでしたよ。」（M.241）そして、最終章「孤独の歌（Das Lied von der Einsamkeit）」では、シュトゥーダー刑事ならぬ、ラドゥーナー博士が事の真相を語るのである。ヘルベルトは犯人ではない、院長は突き落とされたのではなく、鉄梯子の下に隠れていたドライバーが引きずり落としたのである、それは死体の姿勢、眼鏡を見ればすぐにわかることだ、むしろこれは「犯罪学の領分」であって精神科医たる自分の立ち入るところではないけれども……。他の点に関わる種明かしも含め、シュトゥーダー刑事は返す言葉も無い。「シュトゥーダーはうなずいた。突然、一切が明らかになった。彼は恥入った。俺は何もわかっていなかった……。」（M.296）つまりと、最終章での敗北も含め、われらがシュトゥーダー刑事は、ラドゥーナー博士との「力比べ」ではほぼ連戦連敗、まさに「勝ち目は無い」のである。

しかし、この探偵小説は、少々頼りない探偵の惨敗ぶりを描くことを通じて、勝者ラドゥーナーのいかがわしさを可視化する。ここまで本論文で注目してきた諸々の身振りをもう一度想い出してみよう。すべては「権力」と「治療」に関わっていた。そして、シュトゥーダーの捜査過程で浮かび上がって

くるラントリンゲン精神病院の暗部もまさにこの二つの結びつきに関わっている。看護人たちの話の端々から明らかになるのは、ラドゥーナーの導入した新たな治療の結果、かつてないほどに死者が増加しているということ、そして殺害された院長はそのデータを整理し「監視委員会」へ提出する書類を作成していたらしい、ということなのである。

「狂人^{マット}が姿を現す (Matto erscheint)」という意味深長なタイトルが付された第20章では、院長代行ラドゥーナーは「監視委員会」の響應をそつなくこなした後、シュトゥーダーを相手に、上機嫌で傷痍軍人患者シュールの作った狂人^{マット}の王国の詩のことを話題にする。「世界を支配する狂人^{マット}！ 赤いボールで遊ぶ狂人^{マット}がそれを次々に投げる、すると革命の炎が燃え盛る！・・・色とりどりの花綱がはためく、すると戦火が猛り狂う・・・含蓄たっぷりです・・・精神病と正常の間に境界線を引けるようになることは絶対にないでしょう・・・」(M.195) ラドゥーナーの話が続き、背景で響くラジオの音楽が軍隊行進曲に変わり、そこでラジオから響くひとりの外国人の声が部屋を満たす。

20万の男女が集まり私に歓呼の声をあげる。20万の男女が私を支える全民族の代表としてやってきた。外国は私の条約違反を責めようとする。私が権力を掌握したとき、国土はすさみ、荒廃し、病んでいた・・・私が国土を大きくし、その威を高めたのだ・・・20万の男女が私の言葉に聞き入っている、全民族が彼らと共に聞き入っている・・・

Zweihunderttausend Männer und Frauen sind versammelt und jubeln mir zu. Zweihunderttausend Männer und Frauen haben sich eingefunden als Vertreter des ganzen Volkes, das hinter mir steht. Das Ausland wagt es, mich des Vertragsbruchs zu zeihen ... Als ich die Macht ergriff, lag das Land verheert, verwüstet, krank ... Ich habe es groß gemacht, ich habe ihm Achtung verschafft ... Zweihunderttausend Männer und Frauen lauschen meinen Worten, und mit ihnen lauscht das ganze Volk ... (M.196)

言うまでもなく、おそらくは小説執筆時にリアルタイムで繰り返しラジオから流れていたヒトラーの演説である。ブラウザーがこの演出によって、ラドゥーナーの思考と第三帝国の思想の親縁性を暗示しようとしていることは間違いないところだろう。しかし、ここでも抜け目のないラドゥーナーは先回りする。彼は黙ってラジオのスイッチを切ると、「狂人^{マット}の帝国の境界

はどこにあるのか」、「ラントリンゲン病院の木舞板の垣根なのか」そうではなく「地上全体を包み込むのではないか」と続け、「私たちは皆人殺しであり、泥棒であり、姦夫姦婦なのではないか」(M.197)と聖書の言葉を引用することで、頭をもたげたかかった疑念を一般化し、流し去るのである。

しかし、小説の展開はこの重い問いを引き継いでいる。その後でラドゥーナーが注いだ睡眠薬入りのシュナップスのために眠りに落ちたシュトゥーダーは、深夜、外出するラドゥーナーの姿を認めて後を追ひ、ボイラー室で何者かに殴られて昏倒している彼の姿を発見する。ボイラーにつっこまれていた書類の燃えさしには、警視監宛てのボルストリ院長の手紙に添えて、以下のようなリストがなお読みとれた。

シェーファー・アルノルト没。8月。塞栓症。U1 棟。

ヴェイマン・モーリス没。8月。発疹チフス。U1 棟。

モージマン・フリッツ没。8月。全般的衰弱、心臓虚脱。U1 棟。

(M. 200f.)

ラドゥーナーの治療の過程で死に至った患者のリストである。しかし、意識を取り戻したラドゥーナー博士は、書類をふたたびボイラーに投げ入れ、火をつけ、シュトゥーダーにこう言った——「過去は灰にしましょう。」(M. 201) この所作と言葉において、一度流し去られたはずのラドゥーナー的思考とナチズムとの親近性は、ほとんどあからさまである。ただし、それは歴史を顧みる私たちの眼差しにとってそうなのであって、小説執筆時の1936年において、そのような眼差しは必ずしも共有されてはいなかっただろう。しかし、精神病院を知悉していた作家グラウザーの眼差しには、新たな実験治療によって死者を急増させたのみならず、その死者の痕跡までも抹消する——そしてその目的のためには探偵にまで薬物を投与する——この精神科医の思考は、この男自身が口にするように、「ラントリンゲン病院の木舞板の垣根」を越えて、「世界全体を包み込み」かねぬものと映っていたのである。

勝利者ラドゥーナーによってすべてが説明される最終章『孤独者の歌』では、このU1棟の死者についても、弁明がなされる。

当院にはチフスの院内病があるのです。[・・・] 私の観察したところでは、痴呆症や緊張病のような二三の絶望的症状が、それも十年も在院している病人たちの症状が、チフス感染を克服した後で突然好転した

のです。[・・・]そこで感染を誘発させるというアイデアがひらめいたのです。最低十年間監禁されていて病状がまったく変わらず、いつかよくなるという希望の兆しが絶無という患者たちのみに限って試みてみました・・・

公開の実験です。[・・・]この実験は例えば睡眠療法より危険度が低いのです・・・睡眠療法では死亡率は5パーセントにのびります・・・チフス実験ではこれほど高くはありません・・・

In unserer Anstalt ist der Typhus endemisch [...] Ich hatte nun beobachtet, daß einige hoffnungslose Fälle, Verblödete, Katatone, nach der Überstehung einer Typhusinfektion sich plötzlich besserten [...] Das brachte mich auf die Idee, eine Ansteckung hervorzurufen. Ich habe es nur an Patienten versucht, die mindestens zehn Jahre interniert waren, deren Zustand sich gleichgeblieben war und bei denen auch wirklich kein Funken Hoffnung bestand, daß sie sich jemals bessern würden....

Ich habe es offen getan [...]Der Versuch war nicht gefährlicher als beispielsweise eine Schlafkur... Bei Schlafkuren rechnen wir mit einer Sterblichkeit von fünf Prozent... Höher ist sie auch nie bei den Typhusversuchen gewesen.... (M.242)

ラドゥーナーはこう述べた後、この実験を監視委員会に報告しようとした故ボルストリ院長については次のように形容する。「この数カ月の院長の言動をわかっていただくには、動脈硬化と老人性痴呆症^{ゼーレー・デメンツ}と称する——ドイツ語で言えばボケですが——精神病についてちょっとした講義をしなければなりません」(M.243) まさに「死人に口無し」とコメントしたくなるところだが、正確には、ラドゥーナーにとって、相手が死んでいるかどうかは無関係である。生きていようが死んでいようが、ラドゥーナーの手つきは対象とするものすべてを死物として操作する点で一貫しているのであって、これはピーターレンを「実物教授用標本 (Demonstrationsobjekt)」と名づける自然科学的実験至上主義に通じる態度なのである。すでにその「実物教授用標本」の章で、ラドゥーナー博士はピーターレンに睡眠薬を投与し「10日間の長時間麻酔 (eine zähntägige Dauernarkose)」に沈下せしめる「睡眠療法 (Schlafkur)」(M.108)を繰り返して試みたことを報告していたのだが、驚くべきことにここ最終章に至って「チフス実験」は「睡眠療法より危険度が低い」という発言をしても、何一つ後ろめたさは感じていない。「人間的に」接していながらも、同時に、「標

本」としてこそピーターレンは貴重な存在だったのである。²⁵

最終章において、勝利の感覚に酔ってしまったラドゥーナーは、もう一人の最良の患者ヘルベルトに対する態度の内実も曝している。

彼は価値ある人間だ、あのヘルベルト・カプラウンは。彼の抵抗を鎮静化させるのにこれほどの好機はいまだかつてなかったし、これから二度とないだろう・・・

er ist ein wertvoller Mensch, der Herbert Caplaun, die Gelegenheit, den Protest bei ihm zum Abflauen zu bringen, war nie so günstig, wird nie mehr so günstig sein... (M.245)

私なら一言で彼を落ちつかせることができます。私なら彼は人殺しなどではないと証明できます・・・どうしてそうしないのか?・・・人殺しであるという観念が治療過程を速めることになりそうだからです。

Ich kann ihn mit einem Worte beruhigen, ich kann beweisen, daß er kein Mörder ist ... Warum tue ich es nicht? ... Weil die Idee, Mörder zu sein, den Heilungsprozeß beschleunigen kann... (M.246、強調はグラウザーによる。)

これが「わが心配の息子 (mein Sorgenkind)」(M.245) と呼ぶ患者ヘルベルトに対するラドゥーナーの偽らざる態度である。「治療過程を速める」ため、治療の「好機」を逃さないためにはラドゥーナー博士は、院長を殺してしまったというヘルベルトの誤った思い込みすらそのままにする。治療のためなら、さまざまな「危険度を伴う」療法も試みる医師であってみれば当然だろう。そして彼自身はと言えば、実験結果の「^{インボンデラビリエン}予測不可能性 (Imponderabilien)」を「運命 (Schicksal)」と同義とする思考のおかげで、人を殺したという思いからは自由でいられるのである。やはり、シュトゥーダーの引っかかったこの医者 of 言葉遣いは、まったく「どうでもよい」ことではなかったのだ。これはあらゆる実験的治療の結果を正当化する決定的な飛躍に関わる言い換えなのである。

これに先立ってラドゥーナーは、患者ヘルベルトのボルストリ院長に対する殺害願望は、父親殺しの願望が転移したものであると、自信満々、「講義調のしゃべり方 (in dozierendem Ton)」(M.229) で精神分析的解説を披露していたのだが、ヘルベルトに対する権力者は、今や、父の警視監カプラウン、ミュンジンゲン精神病院院長ボルストリである以上に、担当医ラドゥーナーである。

私は医者です、シュトゥーダー、すでに一度言ったことです・・・魂の医者です・・・いかなる権力が私に握られているかわかりますか？
Ich bin Arzt, Studer, das habe ich Ihnen schon einmal gesagt ... Seelenarzt ...
Können Sie sich vorstellen, welche Macht mir in die Hand gegeben wurde?
(M.246)

この言葉は、「実物教授用標本」の章で医学用語の使用を「どうでもよいこと」と流した言葉の裏に、どんな真実が隠されていたかをはっきりと教えてくれる。「すでに一度言ったこと」を、もう一度引用しよう。

・・・私は医者です、魂の医者です、これは外の世界で少々嘲りも込めて口にされることで、というのも外来語を用いる私たちは時として少しばかり滑稽であるからですが。これはまあどうでもよいことです・・・
... ich bin Arzt, Seelenarzt, wie man uns draußen mit einem ein wenig spöttischen Lächeln nennt, weil wir manchmal ein wenig komisch sind mit unsern Fremdwörtern. Aber das ist nebensächlich... (M.101f.)

「ラドゥーナ博士の言葉がこの書類の束を蘇生させたのだ」——このシュトゥーダーの言葉が何を含意していたかはもはや明らかだろう。グラウザーは、文字の羅列に還元された患者にふたたび生きた人間として向き合おうとしている医師ラドゥーナの人間性を賞揚しようとしているのではない。少なくともそれだけではない。問題になっているのは、患者を文書化することでもできれば、蘇生させることもできる医師の恣意的権力、「きちんとした人間」、「価値ある人間」^{インボンデラビリエン}を選別することのできる恣意的権力であり、新たな実験に内包された「予測不可能性」を「運命」と言い換え、そしてその運命の記録文書を灰にしてしまうことに何の躊躇いも感じない精神のありようなのである。

いかに人間的な関係が続けようとも——グラウザーと M・ミュラーの間に交わされた書簡はそれを証している——精神医学そのものに内在している棘はグラウザーに引っかかり続けていた。それゆえにこそグラウザーはこの小説を書かねばならず、またその書き方に苦勞して改稿を繰り返したのであり、最終的には「探偵小説」の枠をアリバイとして使うことによって、そしてそこで主人公を謎解きに失敗させることによって、グラウザーはその引っか

りを眼に見える形にすることに成功した。実生活においては、「禁治産宣告 (Entmündigung)」されたグラウザーは「後見人 (Vormund)」の保護の下に置かれ、「口 (Mund)」を持つ法的主体と認められることはなかった。しかし、小説を書くという迂回路を通じて、グラウザーはみずからに判決を下した巨大な言説に抵抗して見せたのである。

悪魔はとうに死んでしまいました、しかし^{マット}狂人は生きています、その点、シュールはまったく正しいのです・・・^{マット}狂人の話を物語に書きおろしてくれといったわたしの注文を、シュールが聞き入れてくれなかったのは残念です。

Der Teufel ist schon lange tot, aber Matto lebt, da hat Schül ganz recht ... Es ist schade, daß Schül mir nie die Bitte erfüllt hat, eine Geschichte zu schreiben ... (M.197)

作中、こう語る精神科医ラドゥナーは、かくいう自分自身が『^{マット}狂人が支配する』という物語に、狂人たち、ヒトラーとともに書き込まれていることに気づいていない。

* 本研究は JSPS 科研費 24520368 の助成を受けたものである。

注釈

- ¹ Glauser, Friedrich: Briefe in 2 Bdn. Hrsg. von Bernhard Echte, Arche Verlag, Zürich 1991, Band 2, S.194. 以下、本文中でグラウザーの手紙を引用する際には、(Br.2 /194) の形で本書簡集の巻数と頁数を示す。なお、本論文中、グラウザーの書いたテキストの引用は日本語で行い、解釈上必要な箇所には、ドイツ語原文を付す。
- ² 種村による翻訳書は以下の5冊である。『狂気の王国』作品社1998年、『クロック商会』作品社1999年、『砂漠の千里眼』作品社2000年、『外人部隊』国書刊行会2004年、『老魔法使い』国書刊行会2004年。なおグラウザーの各国における受容の詳細については、Irene Weber Henking/Anne-Christine Bussard, Glauser-Übersetzungen. Eine Übersicht. In: Quarto. Zeitschrift des Schweizerischen Literaturarchivs (32), 2011, S.71-73, 日本における受容の評価については、Fuminari Niimoto: Vom alten Zauberer übersetzt - Friedrich Glauser im Japanischen, in: ders., S.90-94. を参照されたい。
- ³ Glauser, Friedrich, Br.2/63f. (グラウザー、『狂気の王国』302-3 頁)
- ⁴ 受賞者の中には、『朗読者』などで知られる、ベルンハルト・シュリンク(1989年受賞)、『絵画鑑

- 定人』などがドイツ語圏を越えて読まれているマルティン・ズーター (2007 年受賞) などがいる。
- 5 例えば、1937 年 12 月 26 日の手紙には次のように書かれている。「これまで出版されたものは、外人部隊小説と『闇の中』を除いての話ですが、書く訓練以上のものではありません。」(Br.2/806) 『闇の中』は 1937 年 10 月に文芸雑誌『ゲーテ・シュリフテン』に掲載された。1928 年に書き始めた外人部隊小説『グーラマ』は、改稿を繰り返した後、1938 年に雑誌『ABC』に短縮版が掲載され、死後、1940 年になって書籍として出版された。
 - 6 Bühler, Patrik, Die Leiche in der Bibliothek. Friedrich Glauser und der Detektiv-Roman. Universitätsverlag C. WINTER Heidelberg 2002, S.105.
 - 7 グラウザーは、1938 年の『狂人が支配する』初版には「不可欠な前書き (Notwendige Vorrede)」を付し、スイスのベルン州にはヴァルダウ、ミュンジンゲン、ベレレイの三つの精神病院があるが、作中のラントリンゲン精神病院はそのいずれでもないこと、登場人物は実在の病院のスタッフ、患者ではないこと、そもそもこれは「モデル小説」ではないことを強調している。にもかかわらず、関係者にとっては、ラントリンゲン精神病院の背後にミュンジンゲン精神病院、個々の登場人物の背後に実在の人物を透かし見ることは容易であり、事実、ミュンジンゲンの町では、出版直後、この小説を買い求めようとする人で書店には長蛇の列ができたことを、伝記作者 G・ザナーは、関係者への聞き取りに基づいて伝えている。ミュンジンゲンの精神科医で作中の「ラドゥナー博士」のモデルとなったマックス・ミュラー (Max Müller 1894-1980) は、作中撲殺される (!) 頑固で保守的な「ボルストリ院長」のモデルと見られていたブラウフリ院長の眼に、この小説が触れることがないよう、万全の策を講じねばならなかったという。Saner, Gerhard: Friedrich Glauser. Eine Biographie. 2 Bde. Suhrkamp, Zürich 1981, Band 2 Werkgeschichte, S.145-150. 参照。
 - 8 Glauser, Friedrich, Mattos Puppentheater, Das erzählerische Werk Band 1. 1915-1929. Hrsg. von Bernhard Echte und Manfred Papst, Unionsverlag, Zürich 2000, S.389. 以下、この書物からの引用は、(MP.389) の形で本文中に頁数を記す。
 - 9 Glauser, Friedrich, König Zucker. Das erzählerische Werk Band 3. 1934-1936. Hrsg. von Bernhard Echte und Manfred Papst, Unionsverlag Zürich 2001, S.126.
 - 10 まだシュトゥーダー刑事の登場しない、この最初の探偵小説はグラウザーの死後、1941 年に出版された。
 - 11 実のところ、このシュテファン・ブロクホフは筆名であり、その背後には、ディーター・クンツ (Dieter Cunz, 1910-1969)、オスカー・ザイドリン (Oskar Seidlin, 本名は Oskar Koplowitz, 1911-1984)、リヒャルト・プラント (Richard Plant, 本名は Richard Plaut, 1910-1998)、この三人の書き手が潜んでいた。なお、グラウザーのこの公開状は、生前には公開されることはなく、1976 年になって刊行された。
 - 12 Glauser, Friedrich, Gesprungenes Glas. Das erzählerische Werk Band 4. 1937-1938. Hrsg. von Bernhard

Echte und Manfred Papst, Unionsverlag Zürich 2001, S.214-220.

- 13 ブロクホフの提示した十カ条は、登場人物が読者のキャパシティを越えて多くなり過ぎないこと、犯人はすでに登場している人物の中にいること、オカルトなど超自然的な要素を入れないことなど、きわめて常識的な実践上の留意点である。ちなみに、探偵小説のジャンルがほぼ確立したこの時期、テリトリーを確立しようとする類似的「箇条書き」はすでにいくつか存在していた。前田彰一はその探偵小説研究において、ロナルド・A・ノックスの「探偵小説十戒」(1928年)、S・S・ヴァン・ダインの「探偵小説作法二十則」(1928年)を代表的なものとして紹介している。『欧米探偵小説のナラトロジー』(彩流社 2008年) 10-14頁、111-121頁を参照されたい。
- 14 Glauser, Friedrich, Mattos Puppentheater, S.359-366.
- 15 Glauser, Friedrich, Matto regiert. Hrsg. von Bernhard Echte, Unionsverlag Zürich 2004, S.11. 以下、本文中、ここからの引用は (M.11) の形で頁数を示す。なお、日本語訳を付すにあたっては、種村季弘訳も参照している。
- 16 Wachtmeister Studer. Ein Film von Leopold Lindtberg, Praesens Film 1939. Matto regiert. Ein Film von Leopold Lindtberg, Praesens Film 1946. 映画化をめぐる詳細については、Glauser, Friedrich, Schlumpf Erwin Mord. Hrsg. von Walter Obschlager, Unionsverlag, Zürich 2005, S.212-216. を参照されたい。
- 17 不自然な第一アクセントは標準ドイツ語における基本的な強勢位置のパロディと理解することができだろう。実際、政治家の演説などにおいて、語を強調する際に、通常とは異なり第一音節に強勢が移されて語が発音されることは珍しくない。
- 18 事実、優劣関係も含意しかねない「標準」というニュアンスが入りこむのを避けるため、スイスにおいては <Dialekt> という言い方よりも <Mundart> という言い方のほうが好まれる。
- 19 Glauser, Br.2/277.
- 20 Glauser, Matto regiert, S.283-290. Saner, Friedrich Glauser. Band2, S.135-154. 参照。
- 21 Matto regiert. S.293.
- 22 実際、シュトゥーダー刑事は、患者ピーターレン、患者ヘルベルト・カプラウン、看護士ギルゲンは、いずれもラドゥナー博士に対する恩義＝負債感情を抱くように誘導された結果、事件に関わる諸々の行動を起こしたのだと、最後の三章において主張する。
- 23 グラウザー自身は、むしろ、精神分析用語に無知であったわけではない。それどころか、すでにギムナジウム時代にフロイトの『夢分析』を読破し、ジュネーヴ大学のクラバレード教授の心理学の講義もぐりで聴講していた。(『三人の老婦人のお茶』には彼をモデルにした教授が登場する。) 患者として精神病院を体験して以降も、精神科医 M・ミュラーから精神医学関係の書物を借りては、手紙の中で批評している。そうした複層的な経験を通じて、グラウザーは精神的言説に親しむと同時に、その言説を構成している専門用語使用の権力性それ自体についても、省察を重ねていたのである。なお、精神分析に限らず、あるいは専門用語に限らず、言

語の表層上の身振りに対する極度の注意深さは、グラウザーの詩学の核心に関わるものであるが、この論点は、長編小説『ゲーラマ』を論じる際に、あらためて取り上げることとしたい。

²⁴ Glauser, Friedrich, Mattos Puppentheater, S.360.

²⁵ H・テューリンクは、このラドゥーナーの姿勢に「生きるに値する存在と単なる生の境界線を恣意的に引く」優生学的思考を認め、すでに1936年の段階でグラウザーにはラドゥーナーに代表される精神医学と第三帝国の生政治の共通性が予感されていた可能性を指摘している。Thüring, Herbert: Das neue Leben. Studien zu Literatur und Biopolitik 1750-1938. Wilhelm Fink, München 2012, S.252-299.